第２部パネル　分科会 16　継続／大阪28

介護におけるエンパワーメントと自立支援のあり方は何か

提言

①その人が本来持っているプラスの力を引き出すため、活動と参加を促す環境を整える
―居場所と役割が重要。

②本人ができることを見極め、「できること」に目を向ける。自己肯定感が得られることが必要で、ピアグループなどが有効。

③専門職が誤った「限界」を設定したり、地域の絆を分断することがないようにする。

登壇者

【進行役】
中村　秀一氏　（一社）医療介護福祉政策研究フォーラム理事長
秋山　由美子氏　元世田谷区副区長、（特非）日本地域福祉研究所理事
井上　由起子氏　日本社会事業大学専門職大学院教授
大河内　二郎氏　介護老人保健施設竜間之郷施設長
近藤　克則氏　千葉大学予防医学センター社会予防医学研究部門教授
二神　雅一氏　（株）創心會代表取締役

■ 寄せられた声から

- ゼロ次から三次、その人、地域の強みを見ていこう。
- 近藤先生の事例をもとにお話しいただいた内容で、「生きる希望が湧く飲み薬があるのでしょうか？」との問いかけ、事例ではＩＣＦの視点の環境因子が生きる希望につながったお話に感銘いたしました。私たち支援する側で限界をつくらないことが大事であることを改めて確認しました。

議事要旨　中村 秀一氏

各登壇者からの発表、討議という形で進行した。

冒頭に各演者からの発表を受けた。

前回の大阪サミットに引き続きの登壇であった近藤克則氏からは、エンパワーメントと予防についての概念について、説明とともに、事例を踏まえて「本来持っているプラスの力」を引き出すことの重要性やインターネットの利用が社会参加、健康指標によい効果をもたらすことの紹介があった。

大河内二郎氏は、老人ホームと誤解されがちな介護老人保健施設の本来の役割である在宅支援機能について説明するとともに、老健における自立支援の実態、コロナウイルス感染症の発生下における利用者の機能維持の状況について報告した。

二神雅一氏は、実践している「もっと『できる』を知る取り組み」について、社内の教育体制、活動・参加促進のための仕組み、就労の場づくり・ピアグループの形成支援、地域への働きかけを説明し、事業所と地域の垣根をなくし、仕掛けと仕組みを作っていくことが重要であると指摘した。

秋山由美子氏からは、行政・社協・地域包括支援センターが一体となって地域の相談に応じている「世田谷方式」や、自身が区民として取り組んでいる「ご近所フォーラム」の活発な活動についての紹介があった。

井上由起子氏は、住まいの専門職の観点から、高齢期の住まいについての概念を整理するとともに、同じマンションに住む仲間と実践している、小規模多機能併設の地域交流スペースを活用した地域食堂の運営を通じて得た知見を報告した。住民がオープンに使える空間（パブリックコモン）をどのように確保すべきかが課題であると指摘した。

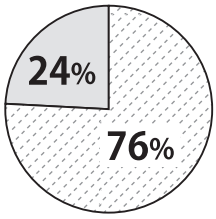
後半の自由討議では、エンパワーメントしていくためには、①本人ができることを見極め、それを関係者で共有すること、②その人の個々の事情を踏まえた（目的に応じた）リハビリテーションが必要であること、③居場所、役割づくりなど支援的な環境を築き、居心地がよく、当事者が楽しめるように工夫していくこと、④本人が自己肯定感を持てるようにしていくこと、が必要であるとされた。

また、避けなければならないこととして、①往々にして専門職が利用者に誤った限界を設定してしまい、「できること」が達成されないこと、②専門職によるケアが地域にあった絆を分断しがちなこと、という指摘があった。

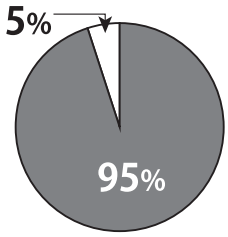
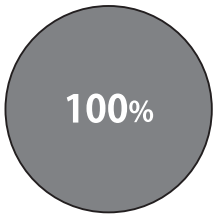
以上の分科会の議論を踏まえ、当分科会の提言として、①その人が本来持っているプラスの力を引き出すため、活動と参加を促す環境を整える―居場所と役割が重要、②本人ができることを見極め、「できること」に目を向ける。自己肯定感が得られることが必要で、ピアグループなどが有効、③専門職が誤った「限界」を設定したり、地域の絆を分断することがないようにする、とまとめた。

アンケートの結果　参加者概数：124名（オンライン：119名、会場：５名）　回答者数：29名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方